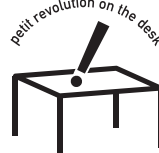


Vol.25

机の上の小さな変革



価値の主観と客観

こんにちは、菅俊一です。この連載ページを開いていただいた方にはいつも1人でいろいろと体験してもらっていますが、今回は可能であれば同僚等をお誘い合わせのうえ3人以上でチャレンジしてみてください。



まず最初に、参加される方はそれぞれA4サイズのコピー用紙を1枚用意してください。一般的にA4サイズの普通紙の1枚あたりの価格を算出すると1円ちょっとくらいだと思うのですが、今回みなさんには、この紙に何かを書き加えることで、その価値を10倍、100倍、可能であれば1000倍以上に引き上げることを目指してもらいたいと思います。

そもそもA4サイズのコピー用紙は、なんでも書ける・使える素材であるという可能性や汎用性自体に価値を持っています。そこに、敢えて何かを書き加え、その可能性を絞ってしまうことにより、価値を上げてもらいたいのです。

「価値」といっても価値観は人それぞれですが、今回のポイントは、自分1人だけが感じるのではなく、できるだけ多くの人が共通に感じる「価値」にすることです。

今回、複数人でのチャレンジをお願いしている理由もそこにあります。みなさん合意のうえで1時間とか明日までなど、自由に期限を設定して取り組んでもらったあと、それぞれの紙を交換して、自分だったらこの紙をい

くらだったら買ってもよいか値付けをしてみてください。もちろん、いらないという答えもありですし、答えやすいように、参加者を増やして誰が書いたものかわからないように混ぜておくという工夫も有効なので、ぜひ多くの人で取り組んでみてください。

—— 他者の価値感を想像しよう ——

今回、「人はどんなものに価値を感じるのか」をテーマに、みなさんに考えてもらっているわけですが、紙に何かを書くというのは、言い換えると「情報をつくる」ことでもあります。

一般的に価値を感じる情報といえば、たとえば希少性の高い情報や役に立つ情報だったり、好奇心を刺激する情報などを挙げることができますが、普段私たちは、主観的な基準だけでこれらの価値を判断しています。

しかし、今回のワークショップでは、自分以外の人がある情報に対して希少性や機能性、好奇心を感じるのかを想像し、具現化していく必要があります。

これは、みなさん自身もその一端を担っている、社会のなかで新しい製品やサービスを生み出し販売するということと同じです。

今回のワークショップを通じて、価値の源泉のようなものを直接つくり出す体験をすることで、自らがアイデアを考え価値を生み出すことのおもしろさとむずかしさについて改めて考えてみてください。 ▲

PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づく新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。